

# 高等専修学校における不登校問題の現状と課題 ：教職員へのインタビュー調査から

芸術工芸高等専修学校

横山 優樹

## 1. はじめに

本研究は、高等専修学校における不登校問題の現状と課題について検討するものである。高等専修学校とは、定時制高校や通信制高校と並ぶ「非主流の後期中等教育機関」（伊藤，2017）の一つであり、「不登校や中退を経験した生徒のためのセーフティネット」（文部科学省，2018）として位置付けられている。実際，多くの高等専修学校が不登校経験や学力不振等のために全日制高校では受け入れが難しい生徒の受け皿となっており，発達障害を始めとする様々な特性を有する生徒も数多く在籍している。同時に，高等専修学校は学校教育法上の「専修学校」にカテゴライズされており，美容・調理・情報工学等の専門教育を施す職業教育機関という性格をも有している。この点において高等専修学校は，同じく不登校経験者の受け入れ先となっている通信制高校と異なり，一定数の登校・出席・実習への取り組みが卒業の要件となる「固いスタイルの学校」（山田，2022）であると言える。

一方，令和4年度の「高等専修学校の実態に関するアンケート調査」では，入学時に不登校の生徒の内，「不登校が改善していない生徒」が14.6%，またその内「不登校で退学した生徒」が3.8%，見受けられる。回収率が47.3%に留まっているのと，転学者数が調査されていないという点で，同アンケート調査の信頼性・妥当性には再考の余地があるものの，不登校生徒のセーフティネットを標榜している学校種において，そこからも零れ落ちてしまう生徒が一定数存在しているということは事実である。

ところが，不登校に関する先行研究を顧みても，高等専修学校に焦点を当てたものはほとんど存在しない。「専修学校という学校種自体がマイナーであり，学校教育の「傍系」としてこれまで教育学研究の対象として取り上げられることが少なかった」のである（竹井，2020）。また，不登校生徒の受け入れ先というと，定時制高校もしくは通信制高校が専ら着目され，全日制であり，かつ職業訓練に特化しているという高等専修学校に固有の条件と不登校経験者の学校適応との関係は，必ずしも十分に解明されていない。

## 2. 先行研究の検討

先述したように高等専修学校を扱った先行研究はそもそも寡少であるが，中でも不登校問題に言及しているものとしては，伊藤秀樹『高等専修学校における適応と進路：後期中等教育のセーフティネット』及び山田千春『高等専修学校の研究：地域の教育ニーズに着目して』の二つが挙げられる。

伊藤（2017）は、従来の「下位ランクの全日制高校」の研究は「その教育実践の困難さや教育実践がもたらす負の帰結ばかりに焦点を当ててきた」と指摘し、むしろ学校適応・進路形成上の困難を抱えている学校で「それらが克服されていくメカニズム」にも焦点を当てる必要があると論じている。その上で、東京都の高等専修学校1校におけるフィールドワークに基づき、生徒間の関係性や教師―生徒間の関係性を含め、学級集団が不登校経験者の登校継続にポジティブに機能していることを明らかにしている。確かに、学校適応が難しい生徒の集中する「下位ランク」の教育機関でも、高い水準で進路形成が行われている学校があることを明らかにしたという点で、伊藤の知見は新しい。とはいえ、学校適応の困難さに着目した従来の研究においても、高等専修学校という学校種は必ずしも取り上げられていない。また、伊藤はあくまで生徒の学校適応を支える因子に着目しており、現在不登校状態にある生徒への働きかけに関しては未検討である。さらに、伊藤の研究はあくまで1校のみのフィールドワークに基づいているため、教育理念や地域環境、生徒層の異なる他の高等専修学校ではどのような現状が見受けられるのかという点は不問に付されている。

山田（2022）は、「そもそも高等専修学校というマイナーな学校種がなぜ存在しているのか」とのリサーチクエストの下、北海道の高等専修学校を調査対象とし、地域の教育ニーズに即した高等専修学校の存在意義について議論している。それによれば、高等専修学校は「中学時代の不登校経験者や発達障害を抱えた生徒」の進学先の一つになっており、かつ、「それらの生徒のなかでも毎日昼に通学する全日制タイプの学校生活を希望する生徒に対して、全日制タイプの高校っぽい教育機会を与えている」という。加えて山田は、卒業生への聞き取り調査を通して、「人間関係をリセットし新たな人間関係を構築することができたところ」や「勉強が苦手だった生徒に対して、勉強の楽しさを体験させる授業が展開されていること」等が、高等専修学校教育の意義になっていると指摘している。他方、不登校問題については、高等専修学校にも「登校できないタイプの生徒」や「進級・卒業を迎えることができない生徒」がいるとした上で、「登校できるタイプとできないタイプのそれぞれの特徴をしっかりと分析し、できないタイプの生徒のケアを学校でどうしていくかを検討すべきであろう」と述べるに留まっている。また、「様々な理由から登校できていない生徒が時数不足で進級・卒業が怪しくなり、通信制高校への転籍（転学）や進路変更（中退）をしている実態からも、登校できていない生徒に対する学校としての柔軟な対応を検討していく必要がある」として、高等専修学校における不登校への対応が今後の検討課題であることを示している。

以上の先行研究を踏まえると、高等専修学校における不登校問題については、その現状や今後の課題等、未だ十分に検討されていないと言える。実際、登校率が改善した事例や学校適応の因子については取り上げられている反面、不登校再発の要因やそこから退学に至る事例についての考究は皆無と言っても過言ではない。ここに、本研究が先行研究を補

完する余地があると考えられる。

### 3. 目的と方法

本研究の目的は、高等専修学校の固有性に即して、同学校種における不登校問題の現状を明らかにし、今後の課題について整理することである。特に本研究では、不登校の再発や退学への対応を巡る教職員の苦労に焦点を当て、高等専修学校が不登校経験者のセーフティネットとして本当に機能しているのか、改めてその実態を問うことを試みる。方法としては、高等専修学校の現職の教職員へのインタビュー調査を行い、KJ法による質的分析を実施する。

尚、ここでいう高等専修学校の固有性とは、不登校経験者のセーフティネットである非主流の後期中等教育機関の中でも、全日制であり、かつ職業訓練校としての性格を持つという点を意味するものとする。

#### 3-1. 手続き

関東圏の高等専修学校（専門学校高等課程）を対象とし、郵送による調査協力依頼を通して調査協力者を募った。インタビューイーの条件としては、勤務年数・勤務形態・役職は問わず、何らかの形で不登校生徒やその保護者への対応に当たっている現職の教員とした。計38校に調査協力依頼書を郵送したが、直接的に協力の回答が得られた学校は3校のみであった。そのため、縁故法による依頼に切り替え、結果として計7校の調査協力が得られた。7校という調査対象校数は必ずしも多いとは言えないが、調査協力者が所属する高等専修学校の学科（分野）は、調理、美容、文化・教養、情報、服飾、工業、商業と多岐に渡っており、幅広いデータが得られたと考えられる。インタビューは臨床心理士・公認心理師・社会福祉士資格を持つ筆者がインタビューアーとなり、個別の半構造化面接を1人につき1時間程度、いずれも1回ずつ実施した。

表1 調査協力者のデータ

	役職	分野
A校	教員（担任）	調理・製菓
B校	校長	美容／文化・教養
C校	副校長	調理／情報
D校	教員（課程長）	服飾／文化・教養
E校	教員（教育部主任）	工業
F校	副校長	美容
G校	教員（課長）	商業

※高等専修学校は数としても少なく、関東圏という点でも対象が絞られてしまうため、個人情報保護の観点から調査協力者の情報（性別、年代、勤務年数、学科名等）に関する記載は極力控えることとした。

表2 インタビュー時の導入文

導入文
<p>高等専修学校は文部科学省によって不登校経験者のセーフティネットとして位置付けられています。しかし、先生方が不登校経験者への対応において何に苦勞されているのか、転学者や退学者がどの程度存在しているのかといった“現場の実態”に関しては、ほとんど明らかにされていません。また、今後どのような対策が必要なのかという展望や、現場の先生方はどのような支援を求めておられるのかというニーズに関しても、十分な調査はなされていません。こうした現状を踏まえて、改めて高等専修学校における不登校経験者への対応の実際と、今後の課題について整理したく、実情をお伺いいたします。</p>

表3 インタビューガイド

領域	詳細	質問
現状	不登校生徒と退学の傾向	<p>「現在、不登校状態にある（不登校傾向のある）生徒はどの程度見受けられますか」</p> <p>「不登校になる要因はどのように感じておられますか」</p> <p>「退学や転学に至る生徒は認められますか」</p>
	対応について	<p>「不登校状態にある生徒にどのような対応をされていますか」</p> <p>「退学や転学に至るケースについては、どのような対応を取られていますか」</p>
	対応上の配慮	<p>「生徒への対応において配慮されていることはありますか」</p> <p>「生徒のサポートのために工夫されていることはありますか」</p>
	対応上の困難	<p>「不登校への対応で難しさを感じることはありますか」</p> <p>「不登校対応に関して、悩まれていることはありますか」</p>
今後の対策	必要と感じる取り組み	<p>「現在の不登校への対応に、不足していると感じられることはありますか」</p> <p>「改善すべきと感じられるところはどのようなところですか」</p> <p>「これからどのような取り組みが必要になると思われますか」</p>
	必要と感じる環境・整備	<p>「設備や環境に関して必要に思われることはありますか」</p> <p>「ソフト面／ハード面にて不足していると思われることはありますか」</p>
学校種	高等専修学校という学校種	「不登校対応に関して、高等専修学校という学校種ならではの良さ／難しさはありますか」

### 3-2. 倫理的配慮

調査協力者には研究の目的とプライバシー保護に関する説明を書面及び口頭にて行い、調査協力はいつでも自由に取り止められること、ICレコーダーにて録音し逐語作成する際には個人を特定するような情報（氏名・住所・電話番号・年齢・性別・土地名・その他の固有名詞）の一切を削除すること、情報の管理を徹底すること等を伝え、同意を得た。

### 3-3. 分析方法

録音したデータから逐語記録を作成し、KJ法にて分析を行った。

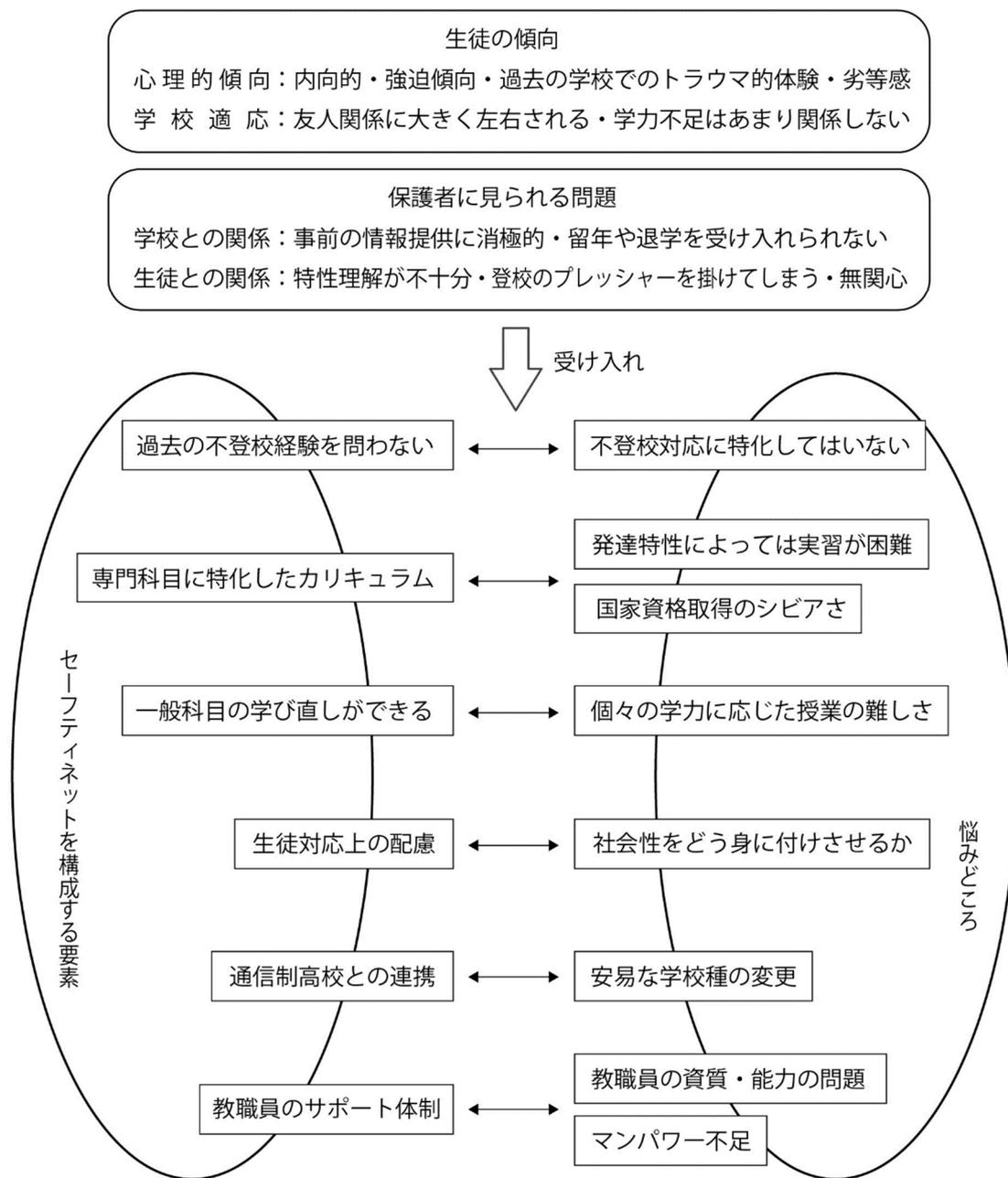
KJ法では最初に逐語記録を意味のあるまとまりに分節化し、そのまとまりにラベルを付けた。ラベルは297枚となった。次いで、類似するラベルを大・中・小の三つのレベルにカテゴリライズし、それぞれのカテゴリに表札を付けた（表4）。その後、表札を空間配置して図解化した（図1）。最後に図解化された結果を文章化した。カテゴリライズの妥当性に関しては、筆者と本校教職員の2名にて確認を行った。

表4 KJ法によるカテゴリ化

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ
生徒の傾向	心理的傾向	内向的なタイプが増えている
		強迫傾向のあるタイプは対応が困難
		過去に学校でトラウマ的な体験をしている
		不登校であることへの劣等感を抱いている
	学校適応	友人関係に大きく左右される
		学力不足はあまり関係しない
保護者に見られる問題	学校との関係	事前の情報提供に消極的
		留年・退学を受け入れられない
	生徒との関係	特性への理解が不十分
		登校のプレッシャーを掛けてしまう
		無関心
セーフティネットを構成する要素	過去の不登校経験を問わない	登校率が大幅に改善する
	専門科目に特化したカリキュラム	スキルが積みあがるので自信に繋がりがやすい
		好きなものが同じというところで友人関係ができる

セーフティネット を構成する要素 (続き)	一般科目の学び直しができる	「勉強が苦手」が自分だけではない
	生徒対応上の配慮	相談しやすい環境作り
		行事を通じた生徒の交流
		別室の用意
		こまめな面談の実施
	通信制高校との連携	転校という選択肢
教職員のサポート体制	友だちのようにおしゃべりができる	
	先生の存在	
	生徒の状態を直観的に把握する	
悩みどころ	不登校対応に特化しては いない	高等専修学校はあくまでも職業訓練校
		入試の基準を見直すべきか
		設置基準と行政の補助の不十分さ
	発達特性によっては 実習が困難	衝動性の高さは器具を扱う際に危険
		実習の班にてコミュニケーションが強制される
		実習にて不器用が歴然としてしまう
	国家資格取得のシビアさ	実習の出席時数はカウントがシビア
	個々の学力に応じた 授業の難しさ	学力の低い生徒に合わせた授業展開 になってしまう
	社会性をどう身に付け させるか	別室を許容すると教室復帰できない
		指導の力加減やタイミングが難しい
		在学中はよくても卒業後に不適應を 起こしてしまう
	安易な学校種の変更	楽な方に流れる形での転校
		教員もミスマッチという判断に流れ やすい
	教職員の資質・能力の問題	教員免許・教員経験がない先生が多い
		発達特性を理解できる先生が少ない
職員研修の効果があまり見られない		
マンパワー不足	先生が相談できる人がいない	
	スクールカウンセラーが足りない・ 機能しない	
	スクールソーシャルワークが必要	

図1 KJ法による図解化



## 4. 結果

### 4-1. 不登校経験者の受け入れの概況

今回、関東圏の高等専修学校に調査協力を募ったが、郵送によるインタビュー調査の依頼に対して直接的な了承を得られたのは、3校のみであった。しかし、その過程で「入試基準に中学での出欠席数を含めており、不登校経験者は受け入れていない」という旨の回答を複数、得ることができた。このことは、一義的には高等専修学校の中にも不登校経験者を受け入れている学校とそうではない学校が存在するというを示しているが、高等専修学校が「毎日登校することが前提」という全日制の厳しさや、国家資格取得に向けて

実習を重ねていく訓練機関としての厳しさを有していることも伺わせる。また、生徒募集において定員の充足に不自由のない学校であれば、不登校経験者よりも登校率の安定した生徒を募るということは自明であろう。無論、不登校経験者向けのソーシャルスキルトレーニングをカリキュラムに組み込んでいたり、独自のサポート体制を築いていたりしている高等専修学校も存在する<sup>1</sup>。したがって、不登校経験者の受け入れの程度という観点では、高等専修学校は不登校経験者を受け入れている学校、受け入れていない学校、積極的にセーフティネットとして自校を位置づけている(不登校経験者を募集の対象としている)学校の、3種に大別されると考えられる。今回の調査では A・B・C・D・E・G の 6 校が不登校経験者を受け入れており、F校は現在、基本的に受け入れを行っていない学校であった。

また、郵送による調査依頼に対して、「本校では長期欠席の場合、生徒が通信制高校への転学を選ぶため、結果として在籍生の中に不登校状態の生徒は認められない」という旨の回答も 2 件、見受けられた。確かに、文部科学省の「学校基本調査」における不登校の定義は年間 30 日以上欠席であるため、30 日以上長欠に至る前に通信制高校へ転校するケースは定義上、「不登校」には該当しない(文部科学省, 2023a)。他方、まさにこうしたケースを「不登校の再発」と捉え、通信制高校への転校を「不登校による退学」と見なすことも可能なように思われる。この点は、今一度不登校や退学の定義を明確にした上で調査をする必要があり、今後の課題である。

## 4-2. カテゴリーの詳細

以下、KJ 法による分析に基づき、インタビュー調査の結果を概観していく。尚、大カテゴリーを【】、中カテゴリーを〈〉、小カテゴリーを『』、小カテゴリーの発話例を「」にて記す。

### 4-2-1. 生徒の傾向

まず、生徒の傾向として、「やんちゃな子」「素行不良の子」が減り、「内向的なタイプの子」が増えてきたということが語られた。内向的なタイプの具体相としては、不登校のため対人経験が乏しく、人間関係をなかなか構築できないということ、普段関わりのあるクラスメイト以外とはあまり交わろうとしないということ、さらには行動力が乏しく、「退学する勇気がない」「転校して新しい環境に飛び込む勇気がない」ため、逆説的ながら退学せずに登校継続となる傾向があること等が語られた。また、特に不登校経験者の心理的傾向として、中学時代のトラウマ的体験が背景にあること、不登校になったことに劣等感を抱いていること、強迫傾向が認められること等が挙げられた。強迫傾向とは、「些細なことを気にしたり、何々しなければいけないという思いが強かったり、一つのことに異常にこだわったり、自分の思い通りにいかないとすぐに落ち込んだり、物事を悪い方向にすぐ考えたり」といった心理的傾向を指し、特にこうした傾向のある生徒は不登校の再発

に陥りやすいという。

【生徒の傾向】〈心理的傾向〉『内向的なタイプが増えている』

「その、学校に行っていない子って、人間関係がなかなか構築できないので、やっぱりすぐぶつかったり、すぐ引いて行っちゃったりっていうのが、すごく多いので…。」

【生徒の傾向】〈心理的傾向〉『不登校であることへの劣等感を抱いている』

「不登校の子達は、不登校になっちゃって、自分はダメな人間って思っている子達って、多いと思うんですね。他の子と違う。もうなんていうんですか、その分劣っているというか。だから、それをなんとかしなきゃって、自分自身は思っているんですよ。」

また、生徒の学校適応に関しては、友人関係が大きく左右するということが指摘される一方で、不登校経験者がしばしば抱えている学力の問題、とりわけ数学や英語といった一般科目における基礎学力の不足は、必ずしも不登校の再発には繋がらないとの話もあった。

【生徒の傾向】〈学校適応〉『友人関係に大きく左右される』

「通えるようになるのは、うーん、ある意味運だなんて思っていて、というのは、その時のクラスに、1人でも話の合う子がいれば、大概なんとかなります。」

「同じ興味を共有してくれる友だちがいる、どんなにマニアックでも、ポケモンでもなんでもいいんですけど、その話で盛り上げられる友だちができれば、それもまた登校してくれますね。」

「やっぱり学校に自分をつなぎとめておくものって、そういう自分のやりがいとか楽しみの大半は、正直友だちとか、つまらないことでも友達と愚痴りながらやる、テストめんどくさいなあって言いながらテスト受けるっていうのも、一つの醍醐味というか。」

【生徒の傾向】〈学校適応〉『学力不足はあまり関係しない』

「好きなことをしたいからということで入学してくるんですけど、勉強面で不登校になるという感じはほとんどないですね。勉強ができる・できないというところだけを以て、学校に来なくなるというパターンは、うちの場合はいないです。」

「それこそ、掛け算ができないとか、割り算ができないくらいのレベルの子は、だいたいクラスに2, 3人は毎年いますね。もしくは、保健の授業、例えば人体の授業や皮膚の授業で漢字が読めないとか、そういうものも学力で劣っているものもありますが、ただそれで、学校を辞めたくなるようなことはないですね。」

#### 4-2-2. 保護者に見られる問題

次に、保護者に見られる問題として、事前の情報提供に消極的である点が挙げられた。これは、保護者が学校に対して、中学での不登校経験や発達特性等の生徒情報を必ずしも事前に明かさない（不登校が再発してから明らかにする）という傾向を指す。

また、保護者が生徒の特性を十分に理解していない（受容していない）場合もあるという。それに関連して、不登校を再発した生徒に登校のプレッシャーを掛けてしまう保護者や、そうした問題が生じても反応が薄く、生徒に無関心であるように見える保護者の存在についても語られた。

さらに、留年や退学となった際、保護者がその事実を受け入れられず、学校との関係性が悪化してしまうケースも見受けられるとのことであった。

##### 【保護者に見られる問題】〈学校との関係〉『事前の情報提供に消極的』

「とある年の事例でいうと、それまで普通に来ていたんですけど、突然パタッとこなくなつて、こちらとの連絡を拒むようになって、で、親御さんに話を聴くと、実は中学校行ってなかったんです、ほとんど行っていませんでした、で、発達障害を抱えていて、張り詰めて頑張ってきたんだけど、やっぱりこう、パンっとう、突然糸が切れちゃいました、みたいな…」

「生徒の特性で一番多いのは ADHD ですね。で、入学前からそういう話を分かって入ってくる子もいますし、学校生活をしている中で、ん？と思って、親御さんに話すと、実は…っていう子もいますし、最後の最後まで言わない、情報が分からなかった子もいます。」

##### 【保護者に見られる問題】〈生徒との関係〉『特性への理解が不十分』

「我々も親御さんに、お子さんがそういう特性というか発達障害を抱えているでしょとは言えないので、親御さんの方から言って頂ければ、そうですかって捉えられるんですけど、こっちからは言えないので、頑なに認めない方もおられますね。」

##### 【保護者に見られる問題】〈生徒との関係〉『登校へのプレッシャーを掛けてしまう』

「やっぱり家にいると、親の監視下にあるので、学校に行きなさいっていう、言葉が浴びせられると、本人としても、身体を起こそうとしていたタイミングで、気持ちがバツと削がれちゃうとか、まあそういったことが何回かあるっていう報告を本人から受けていたので、ただお母さんの的には、だったら行きなさいくらいのことではあるでしょうけど、まあその間にうまく入って、ここは我慢して、今は本人の気持ちに任せてみましようみたいな段階を踏んでみたりとか、そういった段階はちよくちよくありました。」

**【保護者に見られる問題】〈生徒との関係〉『無関心』**

「改善する子としない子，一番大きな違いを考えると，やはりご家庭の状況かなってというのは正直感じる人が多いです。やっぱりすぐにこう，子どもに対して働きかけてくれたり，学校と一緒に相談し合える状態だったりというところで，まあ，リカバリーが早くできるっていうところはあって，一方で，何かあったときに，「まあ，そういうやつです」とか，「ああ，またですね，わかりました，言っておきます」とかで，あんまりこう，協力的と言うよりかは，重く受け止めてないのか，生徒本人に訊いても，全然話しないよとか，あんまり家にいないよとかが多いので，まあそれだけではないと思うんですけど，そうしたご家庭の色合は，影響はしてくるかと思いますね。」

**【保護者に見られる問題】〈学校との関係〉『留年・退学を受け入れられない』**

「補習が終わらなかったとか，そういう話をすると，トラブル気味に「なんでだ」というのが，結構来るんですよ。私達もそうならないように，保護者の方にも細かく伝えておいたり，「これ逃すと本当に大変だから，ご家庭でもなんとかご指導ください」って言っても，実際に来ませんでした，で，もう1回チャンスはないのか，いや，こういう約束だったので，ここでまた軽く，じゃあもう1回っていうのも本人のためにならないと思います，という流れになるんですけど，じゃあこの1年なんだったんだとか…。いい形というか，穏やかに終わるといのはなかなか難しいなと思います。」

#### 4-2-3. セーフティネットを構成する要素

次に，高等専修学校が持つ不登校経験者のセーフティネットとしての機能，すなわち，学校としての受け入れ体制や日々の生徒対応上の配慮，登校率改善の因子等に関する語りを整理していく。

まず，中学校での出欠席の日数を問わないという，入試の基準を巡る語りが見受けられた。また，中学校にて不登校であった生徒も，入学後に大幅に登校率が改善することがあるとのことであった。さらに，そうしたケースについて，専門科目に特化したカリキュラムが登校率の改善に影響しているとの印象が語られた。他方，一般科目に関しては，学び直しができること，勉強が苦手な生徒が自分だけではないことが，不登校経験者の安心材料に繋がっているという指摘が見られた。

**【セーフティネットを構成する要素】〈過去の不登校経験を問わない〉『登校率が大幅に改善する』**

「中学でいくら学校に通っていなくても，うちの面接と作文，入試の結果で問題がなければ，入学させています。で，現状まったく中学に行けていない子でも，うちに来ると来れるようになる子はいるんですね。」

【セーフティネットを構成する要素】〈専門科目に特化したカリキュラム〉『スキルが積みあがるので自信に繋がりやすい』

「高等専修学校って、割と、実技的なこと、実習的な授業、多いじゃないですか。それだと、できる子がいるんですよ。で、それがあから来れる子がいるんですよ。実技に関しては、みんなゼロから始める子がほとんどじゃないですか。みんな何もないところから、みんな一緒に。だから、そういうのが、本人の自信というか、そういうものに繋がっていくんです。」

【セーフティネットを構成する要素】〈専門科目に特化したカリキュラム〉『好きなものが同じというところで友人関係ができる』

「本人たちが熱中できるものとして、調理とか、お菓子作りとかいう場を与えているので、目的として持っているものがだいたい一緒っていうのは、あの、会話が苦手な子たちでも、実習の話で、共通の話題がもう既に備わっているということになるので、そういった意味では、会話に困っている生徒はあんまり見たことがないですね。」

【セーフティネットを構成する要素】〈一般科目の学び直しができる〉『「勉強が苦手」が自分だけではない』

「学校の勉強は、ふたを開けてみたらみんな嫌いっていうのがあって、自分だけじゃないっていう、そういうところもあるんじゃないかと思うんですよね。」

セーフティネットを構成する要素を巡っては、教職員の日々の生徒対応に関する言及も数多く見受けられた。具体的には、相談しやすい環境作りとして、職員室を入りやすい空間にするという取り組みについて語られた。また、行事を通した生徒同士の交流や、別室の用意、生徒・保護者とのこまめな面談の実施等が、生徒対応上の配慮として挙げられた。

【セーフティネットを構成する要素】〈生徒対応上の配慮〉『相談しやすい環境作り』

「生徒達がいつでも入っていいスペースを職員室の中に設けて、最初はぜんぜん入ってこなかったんですけど、ここでお昼ご飯を食べたり、意外と休み時間に、そのスペースで敢えて過ごす子とか出てきたので、職員室という空間でありながらも、そのワンスペースがあることで、担任とのやり取りもしやすくなったというところで、一つ成功体験なのかなと。」

【セーフティネットを構成する要素】〈生徒対応上の配慮〉『行事を通した生徒の交流』

「やっぱり、アイスブレイクじゃないですけど、交わる行事、まあそれが入学する前からあった方がいいなというので、先手を打ったんですよ。合格者対象の実習会。やっ

ぱり入学して顔を合わせて、入学式でピキーンとなるよりは、ある程度、こう、あの  
子もいた、この子もいた、っていう状態で入ってきてもらった方がいいということ。」

【セーフティネットを構成する要素】〈生徒対応上の配慮〉『別室の用意』

「その子は、教室には入れないですけど、2階にあるスペース、あそこは人が結構出入  
しているんですけど、あの空間で別室なんですね。そういったところで、学習を継続さ  
せながら、担任の先生は教室に戻ろうっていうことは一切口に出さずに、なんらかのき  
っかけで復活することを願いつつですね、ずっと対応していて、先生たちも教室に行く  
時にそこに寄って、今日の課題こんなんだよって言って、降りてくるときにまた寄って、  
みたいな…。」

【セーフティネットを構成する要素】〈生徒対応上の配慮〉『こまめな面談の実施』

「生徒達との二者面談が終わった後に、保護者との二者面談も週続きで行わせていた  
だいて、やっぱり子供がいる時には話せなかった事実とか、そういったこともお伺い  
しながら、おうちではそういうこともあるんだとか、逆に学校ではこういう姿なん  
ですけどっていう報告も兼ねて、そういうやり取りをしていく中で、あ、そんな姿があ  
ったんだ、っていうのが、お互いにその時間を使って知れたっていうふうなところで。」

また、不登校経験者を受け入れる上で、通信制高校との技能連携がいわば二重のセーフ  
ティネット機能を果たしていることが語られた。すなわち、高等専修学校にて不登校が再  
発した場合に、技能連携先の通信制高校が転校先として受け皿になるということである。  
尚、技能連携とは、高等専修学校にて習得した専門科目の学習成果が高等学校（通信制高  
校）における単位として認められるという制度であり、今回の調査対象となった7校はす  
べて、通信制高校との技能連携を行っていた。

さらに、教職員が生徒にとって相談しやすい存在となることや、そのために生徒と興  
味の対象を共有すること、さらには、その場その場で直観的に生徒の状態を理解し、臨  
機応変に対応することの大切さについても語られた。

【セーフティネットを構成する要素】〈通信制高校との連携〉『転校という選択肢』

「すごく頑張っているけれど、ちょっとさすがに無理だな、という時に、ポジティブな  
気持ちで学校種を変えてもらうということもできるんですね。無理にこの環境で生かし  
きろうとしない、というのがお互いのためになるっていうコントロールは、具体的な言  
葉には表していないですけど、ほぼいろんな先生がしています。」

【セーフティネットを構成する要素】〈教職員のサポート体制〉『友だちのようにおしゃ

べりができる先生の存在』

「職員室もあのよう壁のない空間ですから、その意味では、どの学年の生徒とも、休み時間とか、ダル絡みじゃないですけど、授業外といういい意味で、コミュニケーションを取ったりとかは、日々意識的にしているかなってところですね。」

「その子と話せるきっかけになったのは、その子がすごくコアなゲームをやっていて、私、その子に黙ってそのゲームを一回買って見たんです。で、実はこういうゲームをやっているんだけどさ、っていうので、何の気なしに話しかけたくらいの雰囲気を出しながら訊いてみたら、え、先生やってるの？ってという返答が返ってきて、それで会話が始まったっていう。だから、相手の趣味に寄り添いながら、会話のきっかけを探しつつ、話し終わるまで待つってというのは徹底していますね。」

【セーフティネットを構成する要素】〈教職員のサポート体制〉『生徒の状態を直観的に把握する』

「甘やかすのではないんですけど、その子に合わせて、叱るべきところと、大丈夫だよって声をかけるところとを、しっかりと見極められればいいのか。だから、やっぱり感覚みたいなのがあるって、上手く言えませんが。「あ、いまこの子こんな感じかな」っていうのを察知できるようになると、わざと声をかけないで、見ないふりをしてあげる時もありますし、そろそろ声をかける時かなと思って、「ちょっとちょっと」と呼び止める時があれば。」

#### 4-2-4. 悩みどころ

本節では、不登校経験者を受け入れる上で教職員が感じている苦労や悩みどころについて整理する。

最初に取り上げたいのは、不登校経験者を受け入れること自体に伴われる悩みである。複数の学校にて、退学者が出てしまうという問題や、入試の基準を巡る葛藤、職業訓練校であることとセーフティネットであることの両立の困難さ等について語られた。

【悩みどころ】〈不登校対応に特化してはいない〉『高等専修学校はあくまでも職業訓練校』

「不登校の子とか、特別支援的な生徒を受け入れるっていうことで経営を成り立たせているところもあるので。ただ高等専修学校ってやっぱり、そこにジレンマがあって、そうではないでしょと、もっと専門的なことを勉強する学校なんじゃないですかっていうのもあるから。本当はね、芸術分野だったら、芸術の高い感性を伸ばすことを目標にしなければいけないし、特に国家資格を出す調理とか理美容とかっていうのは、ある程度の能力は必要なので、そこがすごく難しいところですね。」

【悩みどころ】〈不登校対応に特化してはいない〉『入試の基準を見直すべきか』

「受け入れたら辞めてもらいたくないし、やっぱり笑っててもらいたい。ただ、受け入れの段階でどうしていくかということで、かなり入試広報と話してはいて。入学の意志がある時点で、不登校に関するレクチャーをしたらどうかっていう話があるんですけど。あとはその、不登校対象の説明会っていうのを別途開くかとか。不登校でもいいよではなく、あなたたちは今どういう状況にいるのかということと、学校の実情とを照らし合わせて、しっかりと納得して頂くしかないかなと。あとは、実技の入試を立てるかどうかですね。今は好きでやればいいよっていう感じで受け入れているんですけど、もう少しそういうテストを厳格にやるべきなのか。」

【悩みどころ】〈不登校対応に特化してはいない〉『設置基準と行政の補助の不十分さ』

「もし不登校生徒に特化するならば、養護の先生とか、常駐しておかないとだめなんですよ。年がら年中、具合悪くなったりとか、問題を起こす子も多いのでね、メンタル的に。でも、保健室も必ずしも設置基準に入っていないし、養護の先生がいなきゃいけないというのも入っていない。」

「私立高校、普通高校並みの補助金が出れば、もう少し環境的にも作りやすいのかなっていうのと、設置基準を、国がもう少し見直しをして、そういう子を受け入れているんだったら、こういう施設やこういう人材が必ず常勤にいて下さいよ、みたいなふうにならないと、経営者の方も動かないですよ。」

また、必ずしも不登校経験者に限られた話ではないが、生徒によっては実技・実習の授業がネックになるとのエピソードが語られた。とりわけ国家資格の取得に関わる学科は、実習の出席時数のカウントがシビアになるため、不登校経験者にとっては高いハードルになる場合があるという。そして、不登校状態の生徒にどの程度の強さ・タイミングで登校を促していくか、という点も悩みどころとして挙げられた。

【悩みどころ】〈発達特性によっては実習が困難〉『衝動性の高さは器具を扱う際に危険』

「やっぱり調理に関しては、火と包丁を扱うので、特性が強すぎたり、指示に従えないっていう子は受け入れが難しいですね。」

「対応に苦勞するのは、衝動的な子ですよ。やっぱり手が出ちゃう、もの投げちゃう。実習室には武器になるものがあるので、それを投げる。衝動的にかっとして投げちゃったりっていう子が何人かいたの。それは、他の子にも危害が出るので、もう押さえつけるしかなくなってしまうので。」

【悩みどころ】〈発達特性によっては実習が困難〉『実習の班にてコミュニケーションが

強制される』

「実習での班分け，班ごとに実習をしなければいけないので，そうすると，中学校であんまりコミュニケーションを取っていない子が，そういうストレスに関して，来られなくなる。」

【悩みどころ】〈発達特性によっては実習が困難〉『実習にて不器用が歴然としてしまう』

「実技を行っていて，いろんな授業があるんですけども，やっぱり器用・不器用って当然あるんですよ。で，同じように教えていても，飲み込みが早い子と，ちょっとのんびりした子がいるんですけども，そののんびりした子に関して，「私は向いていないんじゃないか」とか，「私はプロになれないんじゃないか」とか，学科より実技ができなくて躓く子，好きで入ったはずなのに，思ったより私は器用じゃなかったんだ，みたいなのはありますね。」

【悩みどころ】〈国家資格取得のシビアさ〉『実習の出席時数はカウントがシビア』

「時間数的なところで，具体的な数字を言うと，逆にプレッシャーになっちゃうかなと思いつつも，言わないまま過ぎていく方が怖いっていうふうなところもあるので，身体が起きることができそうだったら来てみようか，というような声掛けをしてみたり，その辺は試行錯誤しながら，言葉の雰囲気を読み取っているのが続いていますね。」

以上は専門科目の実習に関する悩みであるが，数学や英語といった一般科目に関しては，個々の生徒の学力差が大きいこと，学力の低い生徒に合わせた授業展開をしなければならないこと等に難しさがあるとのことであった。

【悩みどころ】〈個々の学力に応じた授業の難しさ〉『学力の低い生徒に合わせた授業展開になってしまう』

「発達障害の子と，いわゆる普通のレベルの子を同時に授業をやると，どうしても発達障害の，能力が低い子に合わせて授業をする傾向にどうしてもなりがちなので，そうすると成績優秀な子が，だんだんモチベーションが下がって行って，だらしなくなっていくっていうパターンもあります。」

「授業に関してはほぼ諦めているというか，レポートをとりあえず埋めるだけでいいやっていうふうに割り切っているんですけど，若い先生とか，あんまりそういう風に言っちゃうとモチベーションとしてどうかと思うし，なんか学校の先生をやっている面白さっていうと，なかなか難しいですよ。」

学習面ばかりではなく，その生徒の社会性やコミュニケーション能力の面を巡っても，

様々な苦勞が語られた。具体的には、別室の利用を認め過ぎると、教室復帰＝クラスメイトとのコミュニケーションが一層難しくなってしまうとの問題が挙げられた。また、登校継続のために生活面の指導を控えなければならなかったり、かたや、学校と卒業後の社会生活とで厳しさのギャップが大きく、社会適応に問題が生じたり、といったジレンマについての言及もあった。

【悩みどころ】〈社会性をどう身に付けさせるか〉『別室を許容すると教室復帰できない』  
「集団に入れない子に関しては、別室に一時的に避難許可をすることもあるんですけど、完全な別室対応っていうことを始めると、学習の継続は望んでいても学校を辞めていくってパターンが見受けられます。高校レベルになると、別室に行かせてあげること自体、通信制で勉強しているのとはほぼ一緒で、あえて実技がメインの学校で、別室で心を落ち着かせても、ずっと別室のままなんです。そこを我々も対応しきれないですし、設備的な面もあって、退学に結びつくってパターンですね。」

【悩みどころ】〈社会性をどう身に付けさせるか〉『指導の力加減やタイミングが難しい』  
「今は学校に慣れてもらい、学校の楽しさを感じてもらおうという認識で、接しているんです。ただやっぱり、高校生として、責任っていうことを意識しなければいけないところではあると思っていて、これだけは最低限やっておいた方がいいよっていうのを、伝えるタイミングですね、それが辛くて、嫌っていうので来れなくなっちゃうと、元も子もないですけど、一般社会に出た時、やっぱり全日制の都立の高校とかに比べると、校則の厳しさは雲泥の差だと思っていて、まあ厳しいからいいとは思えないですけども、その代わりに、大変なことを伝える手段としては、教員側がどこかでタイミングをつけて、伝えてあげなければいけないところがあるので。」

【悩みどころ】〈社会性をどう身に付けさせるか〉『在学中はよくても卒業後に不適應を起こしてしまう』

「卒業して、社会に出て挫折して、引きこもっちゃうみたいなのがいますので、そうすると学校の意味としてどうなのかとも思いますけど、いや、3年間だけでも不登校が治ったからいいじゃないかという、そこが学校の限界ですよ。だからうちを卒業してその先就職ですってなった時に、難しいはやっぱり難しいので、個別相談、体験入学の時に、いろんな特性を訊いて、うちでは見れる範囲だと思うけれど、進路は厳しいと思うので、そこはご理解下さいっていう話はしていますけどね。」

「セーフティネットを構成する要素」に挙げられた通信制高校との技能連携制度に関して、しばしば悩みどころになるとの語りが見受けられた。すなわち、楽な方に流されると

いう形で通信制高校に転校してしまうようなケースがあったり、教職員も「通信制に移ればよい」と安易に判断してしまうケースがあったりするという。

【悩みどころ】〈安易な学校種の変更〉『楽な方に流れる形での転校』

「留年となると、多くの方が通信制への転校をまずは考えますよね。それももちろん、一つの選択肢としてはありますし、ただ、一つの妥協案じゃないですけど、こうなっちゃったからこうしようみたいな、あんまり通信制への転校を軽く考えてはほしくなくて、やっぱり、そうなった時には、なんでうちの学校はこういう結果になって、留年になっちゃったのかということ、次にまた同じ失敗をしないように、そこをどう考えていくかということ、ご理解のある保護者の方だと、時間を取ってお話できたりはするんですけど、中には正直、本当、逃げるようにいなくなってしまう方もいらっしゃいます。一番悲しいのは、転校しました、で、しばらくしたら転校先からも辞めちゃったんですよね、という話を聞くと、それこそ、そうなる前に違う方向もあったんじゃないかというのを、一緒に考えられたらよかったんじゃないかと思いますね。」

【悩みどころ】〈安易な学校種の変更〉『教員もミスマッチという判断に流れやすい』

「不登校状態が続いて、9月頃、もう放っておけないし、お母さんに連絡を取って、どうしましょうって話をしたんですね。で、その時に担任が、通信制高校に転校したらよい、みたいなことを言ったらしいんですよ。それでお母さんが困って私のところに来たので、休学という手もありますよと言ったら、休学にして下さいとなって。」

「これが高校段階の怖いところでもあるんですけど、一定レベルになったら対応できないと判断することもできるんですよ。なので、退学していくっていうのと違って、退学させるっていう選択肢もあるのが高校なんですね。」

今回のインタビューイーの中には複数名の管理職が含まれていたが、そうした役職にある教職員からはしばしば、先生方の経験や知識の不足という問題が悩みとして語られた。より具体的には、専門科目の授業を担当する教員は基本的に教員免許・教員経験がなく、生徒対応に難しさを感じる人が多いということであった。また、発達特性に対する先生方の理解が不足しているという点が課題として挙げられる一方、職員研修を行ってもあまり効果が見られないという悩みも語られた。

【悩みどころ】〈教職員の資質・能力の問題〉『教員免許・教員経験のない先生が多い』

「教員免許持っている職員は一握りしかいないので、それ以外は現場にいた人たちの集まりで職員やっているので、やっぱり分からないんですよ、子どもたちをどうやって導くのが正しいか、どういう指導の仕方が正しいか。手探り状態で全部やっているので。」

「高等専修学校って専門分野に特化した人間が教員をやるので、教員経験がない、もしくは教員免許がないっていう方も、担任を持たざるを得ないってなると、やはりそこで非常に悩まれる場合が多いかなあと。」

【悩みどころ】〈教職員の資質・能力の問題〉『発達特性を理解できる先生が少ない』

「先生によっては、説明が上手にできない、明確に指示が出せない、で、まあちょっと発達障害があったりすると、明確にその子に今何をしなきゃいけないくて、どうするべきかを伝えられていない。」

【悩みどころ】〈教職員の資質・能力の問題〉『職員研修の効果があまり見られない』

「一応、発達障害についての職員研修も年に1度はやっているんですけど、年1度やって、それで改善できるかという、なかなかそうはいかない。で、今きちんと、そういった形で対応ができている先生は、一回の研修で、あ、発達障害ってそういう見え方をしているんですね、ときちんと理解してくれますけれど、どうしても、そこをなかなか理解できないっていう教員も多いので。」

管理職の語りには、マンパワー不足にまつわる悩みも認められた。それは、端的に人手が足りないという指摘に留まらず、先生方が相談できる相手（専門家）がいないという問題や、スクールカウンセラーが足りない、もしくは上手く機能しないといった問題への言及も見られた。さらに、学校がスクールソーシャルワーク的な機能を果たすことを求められるケースについても語られた。

【悩みどころ】〈マンパワー不足〉『先生が相談できる人がいない』

「なかなか難しい年齢の子たちなので、コントロールができないというか、反発心もありますし。気持ち的にはどっと疲れますね、1週間終わると。そうなってくると、我々職員側が相談できる場所というか、そういうものがあるとまた違うのかなって。こういう時はこういうふうにしましょうじゃないですけど、それはあったらいいのかなと思ったりします。ただ大方は今のところ、解決に近くなっている。まああの、なんでしようね、すごく先生たちも色々、悩んでいると思うので、体壊すんじゃないかなっていうところももちろんあります。」

【悩みどころ】〈マンパワー不足〉『スクールカウンセラーが足りない・機能しない』

「カウンセラーは常駐してほしいです。教員としてずっといるカウンセラーの先生がほしいです。そうするともう、何時でも相談できる。できればタイプの違う先生、女性と男性みたいに。そうしたら高等専修学校でも、カウンセラーが常駐していて、それも複

数人いたりしたら、もっと救えると思います。」

「生徒の動向を見て、独自に動いて下さるカウンセラーの方が、高等専修学校としてはありがたいかなと思いますね。以前おられたカウンセラーは、どちらかという「待ち」のタイプで、相談が来たら乗るけれども、自ら見に行ったりするのが苦手な方でしたね。だからそういうのを含めて、こっちとしては、じゃあ学校行事、この行事をやるから参加して下さいね、ってお願いをすると、そういう対応をするのは、ちょっと私は困る、困るっていうか、よその学校ではそうではない、と言われるので、まあなかなか、普通の公立とか、私立高校のカウンセラーの先生も、やっぱりうちに来ると対応がなかなか難しいみたいですね。」

【悩みどころ】〈マンパワー不足〉『スクールソーシャルワークが必要』

「生徒のサポートとかで、学校の枠を越えちゃうことって時々あるなあと思うんです。やっぱり自治体の力だとか行政の力を借りたいなあって思う時に、私達が勉強をして知識をつけるというのももちろんなんですけれども、それこそサポートセンターとかいろいろあるじゃないですか。そういう機能が学校の中があれば早いし、結局生徒のためになるよなあって思ったんです。やっぱりその、学校外のサービスと直通できる学校にしたいなあっていうのは、生徒の最近の、家庭内の悩みだとかを聞いた時に、もっとスピード感を持ってやりたいと思いましたね。」

## 5. まとめと考察

### 5-1. セーフティネットの多義性

以下、前節で概観したKJ法による分析の結果について、改めて整理したい。

まず、教職員の語りに見て取れたのは、不登校経験者の受け入れそのものを巡る葛藤であった。すなわち、高等専修学校はあくまで全日制の職業訓練校であり、そのために様々なシビアさを有しているが、他方で生徒募集上の必要もあり、不登校経験者を受け入れていかざるを得ないという葛藤である。無論、これは「不登校経験者を受け入れている学校」「受け入れていない学校」「積極的にセーフティネットとして自校を位置づけている学校」という分類の内、「不登校経験者を受け入れている学校」に特異的に認められる葛藤であり、かつ、学科によってもその程度は異なるであろう。しかし、非主流の後期中等教育機関の中でも全日制の職業訓練校である高等専修学校のみが晒されている固有の葛藤であるように思われる。

この固有性という点では、調理師や美容師といった現場のプロが教員となることが多いのも、高等専修学校ならではの特色であり、生徒対応やクラス運営の難しさという点で悩みどころにも繋がっていた。生徒対応に関しては職員研修に取り組んでいる学校もあったが、その効果がなかなか見られないとの指摘も見受けられた。さらに、配置基準や補助

金等の制度面でも養護教諭やスクールカウンセラーの配置が義務ではなく、そうした環境整備が積極的に進まない実情があることも語られた。

加えて、高等専修学校特有の「専門科目に特化したカリキュラム」が、不登校経験者の登校率の改善に関係しているとの認識が見受けられた。すなわち、専門科目にて好きなことを学び、技術を修得して自信を付けていくことが、登校率の改善に繋がるということである。他方、国家資格取得に関わる専門科目は実習が必須であることから、補習の実施も厳格であり、不登校経験者にとってはハードルが高い場合があることが語られた。また、発達特性（衝動性の高さ）があると実習が難しかったり、班行動であることや器用さを要求されることがネックになったりするとのことであった。

また、教職員の語りからは、登校のモチベーションとなるのは専門科目そのものよりも、専門科目＝興味の対象が周囲と同じであること、それに関連する共通の話題があること等がクラスメイトとの関係構築を促し、その関係性こそが登校継続の要因となっているという可能性が示唆された。しかし、これは裏を返せば、友人関係が上手く構築できなかった時には、それによって不登校の再発が惹起されるということでもあろう。そして、現場の教職員はまさに、そうした友人関係により留年や退学に至ってしまうケースに苦労しているようであった。

同時に教職員は、友人関係を巡る問題に対処するため、様々な工夫に取り組んでいた。例えば、行事を通して生徒同士の交流を促したり、教員自らがその生徒とゲームをする・雑談をする等して、信頼関係の構築に努めたりしていた。とはいえ、気の合う子と出会えるか否かは「ある意味運」とも言え、ここに難しさがあるようであった。ちなみに不登校経験者の学校適応を促す環境因としてしばしば少人数制が挙げられるが、少人数であることは出会いの幅が限られるということでもあり、その意味ではむしろ学校適応の可能性が狭まるようにも思われる。

さらに、一般科目の学び直しができるという点であるが、これも不登校経験者にとってメリットである一方、教員にとっては「学力の低い生徒に合わせた授業展開になってしまう」「成績優秀な子のモチベーションが下がってしまう」等の悩みどころにも繋がっていた。

また、授業以外での生徒対応の場面でも、生徒の状態に応じて指導を控えたり、日頃から雑談を通して相談しやすい関係性を築いたり、といった様々な工夫や配慮が為されている一方、こうした手厚い配慮がある故に厳しい生徒指導が難しく、さらには卒業後、在学中との周囲の配慮のギャップが大きく、上級校や社会生活において不適応を起こしてしまうという問題についても語られた。

通信制高校との技能連携も、不登校が再発した時の第二のセーフティネットとして機能することもあれば、楽な方に流れる「安易な転校」という形で、生徒・保護者が問題の先送りをしてしまうこともあるとのことであった。

以上の調査結果を鑑みると、高等専修学校が有しているセーフティネットとしての機能

は、登校継続の支えとして作用することもあれば、時に不登校経験者にとってのハードルや弱みに転化し、教職員にとって悩みどころにも繋がり得ることが分かる。本研究では、これを「セーフティネットの多義性」と呼ぶことにする。図1にて示したように、この多義性はセーフティネットを構成する要素のポジティブな面とネガティブな面のウラオモテ、ないし反転図式として捉えられよう。こうしたある種の二律背反的な状況こそ、不登校経験者を受け入れている高等専修学校の実情ではないであろうか。

## 5-2. 考察

では、高等専修学校が不登校経験者のセーフティネットとしてより効果的に機能するためには、今後どのような対策が必要なのであろうか。

まず触れておきたいのは、インタビュー調査協力者のほとんどの教職員が、不登校経験や発達特性を持つ入学者が増加傾向にあると感じていたという点である。無論、これは肌感覚として語られたことであるが、不登校数は全国的にも増加の一途を辿っており、その限りで高等専修学校の在籍生に占める不登校経験者の割合も自ずと増加していく可能性がある。ここにおいて、高等専修学校が担うべき役割も改めて問い直されるのではないであろうか。すなわち、学校として不登校経験者を受け入れるのか、受け入れるとすればどの程度受け入れるのか、そしてどのような方針の下で不登校経験者に対応していくのか、俯瞰的に見つめ直すことが求められているように思われるのである。これは単に経営的な問題ではなく、後期中等教育の段階において高等専修学校が果たすべき社会的な役割にまつわる問題である。小野・保坂（2023）は、高校を「子どもから大人への移行の場」として位置づけ、「高校生の移行支援を保障するためには、ただ単に高校が存続すればいいというのではなく、現在の高校教育の成果主義的な傾向を阻止し、思春期の発達課題に向き合うものに変えていく必要がある」と論じている。高校教育（後期中等教育）は「とりあえず卒業して職に就けるようにするという単純なものではなく、自分の生き方について迷い、悩む時間と安全な場、そしてそれを支える大人の存在が保障されるものでなければならない」。本研究にて描出した「セーフティネットの多義性」を踏まえて言えば、職業訓練校として一定の能力を生徒に求め、就職や資格取得といった目に見える成果を評価していくという志向性と、セーフティネットとして様々な課題を抱えた生徒を受け入れ、可視化しにくい内面的成長・心理的発達を支えていくという志向性との間で、学校としてどのようにバランスを取るのかということが、重要な課題となっているように思われるのである。

以上のような問題意識を前提として、教職員が抱えている現場のニーズを今回のインタビュー調査から抽出してみたい。第一に、養護教諭やソーシャルワーカー等の専門職も含めた人員配置の拡充という点が挙げられる。これはほとんどの学校にて言及されたニーズであり、とりわけ生徒数が増加傾向にある学校では、現状のマンパワーでは今後、手厚い個別対応が難しくなるとの懸念も伺われた。またスクールカウンセラーに関しても、単に

人数や勤務日数の拡充のみならず、「相談室で待つのではなく、自ら主体的に生徒・教職員と関わってほしい」といった要望が聞かれた。尤も、人員配置は設置基準や補助金といった制度面にも係る問題であるため、本研究でこれ以上論究するには限界がある。他方、今回のインタビュー調査では、学外の支援機関との連携に関するニーズも聞かれた。この外部機関との連携は、学内における人員配置の不足を補うという意味を持ち得るように思われる。というのも、確かに養護教諭やソーシャルワーカーが学内に配置されていることが望ましいには違いないが、日頃から地域資源を開拓し、関係機関との連携体制を築いていくことで、医療や福祉の介入が必要なケースにもスムーズに対応することができからである。これは文部科学省の提唱する「プラットフォームとしての学校」、すなわち学校が地域における支援活動の拠点となるという方向性とも重なる（文部科学省、2023b）。尚、令和4年度「高等専修学校の実態に関するアンケート調査」では、「特色ある取り組み」として回答校86校中、10校が「スクールソーシャルワーカーの配置」を挙げているが、「具体的な取り組み事例」の中にスクールソーシャルワーク事例は見当たらず、学校と地域のクリニックや福祉機関との間にどのような繋がりがあるのか必ずしも明らかにされていない。公立校では文部科学省のスクールソーシャルワーカー活用事業を契機にスクールソーシャルワーク事例が蓄積されつつあるが、後期中等教育のセーフティネットとして高等専修学校が果たす福祉的役割については未だそのビジョンが示されていない。ここに、今後のセーフティネット機能強化の一つの方向性が見出されるように思われる。

さて、インタビュー調査の結果から伺われる現場のニーズとしては、教職員の資質・能力の向上という点への言及も頻回に見られ、その重要度の高さが伺われた。具体的に言えば、職員研修等を通して、教職員に発達障害の知識や生徒対応のスキルを身に付けさせるというニーズである。しかし、職員研修ではなかなか効果が上がらないという意見や、結局は経験年数がものを言うという意見も聞かれ、職員研修の在り方にも工夫が求められている現状が認められた。実際、講義形式の研修では個々の教職員が抱えている課題は扱われず、生徒対応の質的向上に繋がりにくいということが推察される。したがって、より個別的・具体的なケースを取り上げる事例検討法や、教職員一人ひとりが当事者としてアイデアを出しあうインシデント・プロセス法等を取り入れ、能動的な学びの場にしていくといった取り組みが必要となるように思われる。

他方、教職員自身が専門家に悩みを相談したり、日々の生徒対応について振り返ったりする場を設けたいというニーズも挙げられた。このニーズは研修というより、コンサルテーションないしスーパービジョンとして捉えられよう。管見では、学校組織としてコンサルテーション・スーパービジョンに取り組んでいる高等専修学校はあまり見受けられないが、教職員が現在抱えている苦労をねぎらい、エンパワーメントしていくことは、その教職員自身のストレスマネジメント、或いは心理的成長の促進という点で有益である

に違いない。学校によっては、職員室での雑談という形で教職員のストレス解消が為されているということも語られたが、「果たして自分たちの生徒対応は正しいのか」という懸念が晴れず、やはり客観的・第三者的な視点がほしいとの言述もあった。さらに、生徒対応に関する語りの中で、「他校ではどのようにされているのか」との質問が筆者に投げかけられることも複数回あった。逆に言えば、多くの高等専修学校は他校とあまり交流しておらず、情報共有がなされていない現状があるということである。こうした外部的視点の不足や情報共有の少なさを鑑みると、高等専修学校は一校一校が孤軍奮闘しており、現場の教職員も外部との関わりがなく、身内で完結しがちである現状が見えてくる。学校を地域資源と繋げていく必要性については上述したが、学内に第三者を招き入れたり、相互研修のような形で他校と交流したりといった方向性も同時に模索されるべきではないであろうか。

以上のようなマンパワー不足や職員研修・コンサルテーションの在り方といった問題は、高等専修学校が学校組織として抱えているニーズであるが、生徒の側は学校に対して何を求めているのであろうか。この生徒側のニーズとして教職員から語られたのは、何より友人関係であった。友人関係こそ登校継続の大きなモチベーションであり、逆に友人関係でのトラブルが退学（転校）の原因となるということである。かつ、生徒によっては対人経験が乏しく、コミュニケーションスキルの面でも課題を抱えている場合がある。ここに、いかにそうした生徒の社会性を育むかということが、教職員側の課題としても浮上するわけである。実際、今回の調査では「別室利用を許容しすぎると教室復帰が難しくなる」「不登校が再発した際に通信制高校への安易な転校をしてしまう」「卒業後の社会生活において不適応を起こしてしまう」等の様々な悩みどころが語られたが、これらはいずれも環境の問題であると同時に、その生徒の社会性の問題としても捉えられよう。

では、生徒の社会性を育む方法としては、具体的にどのようなものが考えられるのであろうか。今回の調査対象校では見受けられなかったが、高等専修学校によってはエゴグラム等の自己理解の深化を促す心理テストを実施したり、ソーシャルスキルトレーニングをカリキュラムに組み込んだりといった工夫が為されている<sup>11</sup>。また、筆者が務める高等専修学校では、新入生の学校適応を促すために、新入生同士の交流の機会としてグループエンカウンタープログラムを導入している。このプログラムは入学当初の4月、1～2週間に渡ってアイスブレイク・自己紹介・他者理解・共同作業といった様々なワークを段階的に行うものである。こうした取り組みはいずれも、対人トラブルが起こってからでの対処法というより、そうしたトラブルを未然に防いだり、そこからのリカバリーを容易にしたりするための予防策であるが、社会性の問題に関してはこの予防こそ重要なのではないであろうか。というのも、実際に対人トラブルが起これば、その対処に際して生徒・教職員双方にかかる精神的負担の大きさは想像に難くなく、結局は退学に至ってしまう事例も少なくないと推察されるからである。今後、各校の様々な予防的アプローチができる限りオ

ープンにされ、相互参照できるようになることが重要であるように思われる。

## 6. おわりに

本研究では、高等専修学校における不登校問題の現状と課題を整理するため、7校の高等専修学校の教職員にインタビュー調査を行った。その結果、不登校経験者のセーフティネットとして機能している様々な要素が、同時に現場の教職員の悩みどころになっていたり、不登校経験者の学校適応上のハードルとなっていたりする二律背反的な状況が明らかになった。また、そうした状況を改善し、よりセーフティネット機能を高めるには、地域の社会資源と繋がることや学校外部の視点を取り入れること、社会性を育む予防的アプローチに力を入れること等が重要であると考えられた。

尤も、高等専修学校は学科によって、カリキュラムも異なれば生徒層も異なる。今回の調査対象校の中では、1校が不登校経験者を受け入れておらず、そのため不登校問題を巡る悩みもほとんどないということであった。また、一つの学校法人内に専門課程と高等課程を併設している学校と、高等専修学校（高等課程）のみで運営している学校とでは、生徒の学校適応の様相や進路決定のプロセス等に違いが出てくるであろう。そうした学科や課程による違いを十分に踏まえて分析できなかったことが、本研究の限界である。

加えて、本研究はあくまで教職員の語りに基づくものであり、生徒・保護者・卒業者等の悩みやニーズを直接汲み取るものではない。かつ、不登校問題の現状を大まかに概観するに留まっており、発達特性の理解や合理的配慮の在り方、進路指導や卒業後のフォローアップの方法等、それぞれの課題の詳細は扱えていない。こうした点も今後の課題である。

最後に付言すれば、筆者自身、カウンセラーとして不登校の再発や退学事例に出会う中で、迷いや悩みは尽きることがない。対応を誤ることもあり、日々試行錯誤している。とはいえ、悩みや迷いがなくなるということは、生徒対応がマンネリ化してしまうことであるようにも思われる。ある意味、二律背反的な状況を解消するより、その葛藤を引き受けて悩み続けることの方が重要なのではないだろうか。本研究が、そうした生徒対応上の悩みや葛藤を大切に扱うことに、多少なりとも資すれば幸いである。

---

<sup>i</sup> 東朋高等専修学校では不登校傾向の生徒を受け入れるクラスが設けられている。また、岩谷学園高等専修学校でもコミュニケーションが苦手な生徒のために別教室が用意されている。

<sup>ii</sup> 佐賀星生学園ではソーシャルスキルトレーニングやエゴグラムが行われている。

〈付記〉

本研究のインタビュー調査にご協力頂きました高等専修学校の教職員の皆様，ご多忙の中で貴重なお時間を割いて下さり，誠にありがとうございました。また，調査協力校の募集にご尽力頂きました本校の入江誠一広報室長，浦野香奈子学校長に，この場をお借りして御礼申し上げます。

〈参考文献〉

- 伊藤 秀樹 (2017). 高等専修学校における適応と進路 後期中等教育のセーフティネット  
東信堂
- 文部科学省 (2018). 未来をひらく高等専修学校 文部科学省
- 文部科学省 (2023a). 学校基本調査 Retrieved from  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/yougo/1288105.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/yougo/1288105.htm)  
(2023年10月25日取得)
- 文部科学省 (2023b). 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査  
Retrieved from  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm)  
(2023年11月7日取得)
- 小野 喜郎・保坂 亨 (2023). 続々 移行支援としての高等教育 変動する社会と岐路に立つ  
高校教育の行方 福村出版
- 大岡学園高等専修学校 (2023). 令和4年度「高等専修学校の実態に関するアンケート調  
査」報告書 学校法人大岡学園 大岡学園高等専修学校
- 山田 千春 (2022). 高等専修学校の研究 地域の教育ニーズに着目して 六花出版
- 竹井 沙織 (2020). 高等専修学校における知的・発達障がい支援の経緯 発達・知的障害  
者の大学教育研究, 3, 36-43.